

牛の肺と肺門リンパ節の転移性上皮性腫瘍

第10回獣医病理学研修会 標本No. 141

農林省家畜衛生試験場北海道支場出題

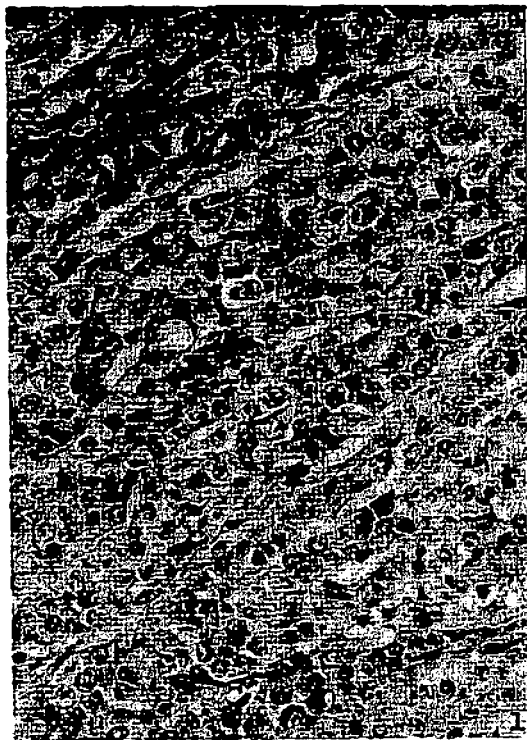


写真1：350倍，肺の腫瘍細胞増殖。

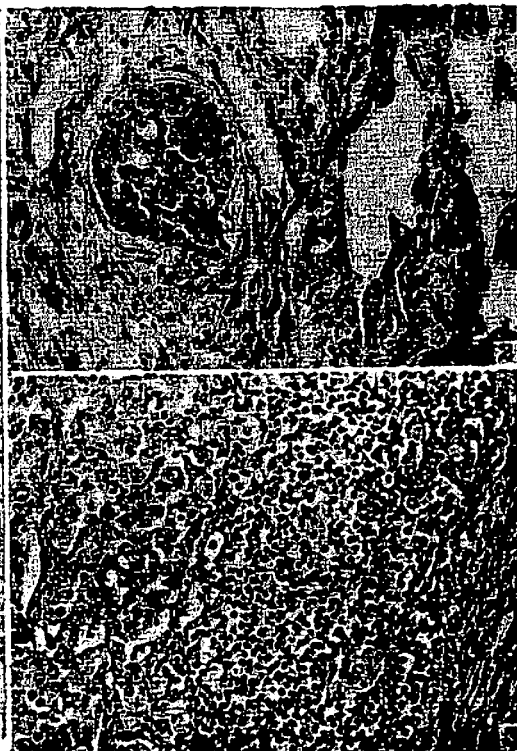


写真2：175倍，肺リンパ管の腫瘍細胞栓塞

写真3：175倍，リンパ節の腫瘍細胞。

標本：牛の肺と肺門リンパ節。固定：ホルマリン。染色：H—E。動物種：ホルスタイン，牝，8才。飼育地：北海道，別海村中春別。臨床的事項：本例は「いわゆる牛の流行性感冒」流行発生の中から病性鑑定材料として送られてきたものである。畜主は19頭を飼養し，昭和44年1月31日に「いわゆる牛の流行性感冒」がこの牛群に発生し全牛が罹病したという。本例は以前から血尿を認めていた。2月3日，共済組合の獣医師が往診し，食欲不振，心衰弱，起立困難，体温 37.5°C ，鼻汁漏出，発汗，発咳を認めた。2月4日にはさらに悪化し廃用殺した。

肉眼的所見：慢性血尿のためか膀胱を中心として子宮卵巣など全体が癒着していた。肺は一面に親指大から小指大の腫瘤があり，軽度の肺気腫もあった。気管支には少量の泡沫液があった。組織学的所見：肺の腫瘍性組織はリンパ道性播種の形で結合織の増生を伴って胸腺下

結合織から巢形成をしている。腫瘍細胞は大小不同で大きく明瞭な核小体，核質に乏しい円形核をもち，細胞質はエオジンに淡染して限界不明瞭でやや泡状を呈している。核分裂像は少数ながら認められる。嗜銀線維は腫瘍細胞塊への侵入を示さない。結合織を足場にした腫瘍細胞増殖があって，一部では乳頭状，または腺管状構造も見られる。正常肺胞と腫瘍巣との分界部では腫瘍細胞の肺胞内侵入を思わせる像も見られる。リンパ節でも旺盛な結合織増生と共に腫瘍細胞増殖があり，固有構造は全く失われている。腫瘍細胞の重層化が強い部分では表層物壊死がある所もある。嗜銀線維の状態から，リンパ洞内に腫瘍細胞増殖が認められる。

組織学的診断：転移した上皮性腫瘍—転移癌—（移行上皮性？）。